

創造の回復 シリーズ 2

「神国論」に見る
新プラトン主義的靈性

島先克臣

目次

I. 「神国論」の世界史観	1
II. アウグスティヌスと新プラトン主義	1
III. 創造論	2
A 人間観	2
B 被造物観	2
IV. 終末論	3
A 聖書的理解	3
B 新プラトン主義の要請	3
C ジレンマの解決	3
1. 肉体召天の教理	3
2. 被造世界の神への吸収・内包化	3
D まとめ	4
V. 後代への影響	4
VI. 現在の生き方、霊性への影響	5
VII. 最後に	6
A まとめ	6
B 聖書的キリスト教に基づく霊性を	6

初めに

神はイエス・キリストによって、人間の霊魂だけでなく肉体も、また人間だけでなく全被造世界をも贖い完成させて下さいます。これがキリスト教救済論・終末論の特徴であり、古代教会と東方教会はそのように理解していました。¹しかしながら、西方ローマ教会とその流れをくむプロテスタント教会の救済論、終末論は、「死んだら永遠に天国」と一般に言われているようになってきました。では、この「死んだら永遠に天国」という思想はどこから来たのでしょうか。この小冊子はアウグスティヌスの「神国論」²に限定してその思想的源流を探るところの門外漢による試論です。専門家の御批判を頂きたく願っています。

I 「神国論」の世界史観

アウグスティヌスの「神国論」は、石原謙によると、「救史的な理解による世界史観を樹立」³したものとされています。石原謙は、神国論を詳細に解説していますが、次のように要約できましょう。

神が与える正義と秩序、平和と愛という創造の秩序によって、家庭も国家も保たれているのだが、それは、不完全で、地上では完成され得ない。教会は確かに教会内に選ばれていない者を含むので内部的闘いは避けられないが、総体として社会を改善する使命があり、それは闘いである。しかし、その闘いは勝利に終わる。なぜなら、教会が志向しているのは「天上の平和」に上昇接近し、神的安息に達する事であり、歴史の終わりにキリストの再臨により、選ばれた者が、変えられた肉体を持って天上の安息に達するからである。

アウグスティヌスが世界の歴史を見る見方は、創造を出発とし、罪との闘いを経て、再臨によって完成するというもので、そこには、社会を闘いつつ改善していくという視点がありました。それに比べ、東方教会（今のギリシャ正教など）は、原罪を認めずに典礼と秘義により神秘的な神との合一を求めたために、国家との対立や改革をめざす基盤が弱かったとされています。この点では、アウグスティヌスのこの「闘争」という視点は、西方教会の社会関与を積極的なものにする思想基礎を築いた、という点で評価できると思います。

II アウグスティヌスと新プラトン主義

しかしながら、アウグスティヌスの求道、改心、その後の彼の神学的発展を貫いている新プラトン主義の影響は否定できません。確かにアウグスティヌスは、あくまでも聖書と教会の信条の枠内にとどまり、正統的な神学体系を目指し、その過程で当時の異教哲学と闘い、また新プラトン主義との違いも明確にする努力をしました。しかし、その神学構築のために使用した新プラトン主義の思想の影響が当然のごとく存在するのです。石原は次のように表現しています。

そこ[神国論]には当然若年時代の彼の精神生活を支配した新プラトニズム哲学の根本思想が殊に強く再現して、その中核をなすテーマにも影響を及ぼし、全体としてその雰囲気の中において思索していたように感じられる趣がなくはない。もちろんその思惟は少なくとも表面的にはキリスト教的に同化され、キリスト教的概念と用語とをもって粉飾されているが、その背後には新プラトニズム的動機が働いてそれを力づけ動かしているのを見るのに難くない。．．．彼にとって修道院的、従って禁欲的生活がその[新プラトニズムの救いの究極としての *ecstasis* に代わるものとしての *contemplatio*]内容を充たし、そしてその瞑想的観照の体験は新プラトニズム哲学によって根拠づけられ支えられていた。従ってこの二つの思想傾向がそれ自身としては緊張を含む性格を備えてい

¹ 拙論、『終末の今を生きる：千年王国説の違いを超えて』改定版、創造の回復シリーズ、no. 1 (2004)、参照。

² 『アウグスティヌス著作集』。茂泉昭男、野町啓訳（東京：教文館、1982）。

³ 石原謙、『キリスト教の源流：ヨーロッパ・キリスト教史 上巻』（東京：岩波書店、1972）、523。

るものであっても、彼の統合的人格と思想との間にて結合されて一致し、矛盾はそこでは決して感ぜられなかった。⁴

III 創造論

聖書的なキリスト教と新プラトニズムという本来異質の二つの思想が完全に一致するはずはありませんでした。そこで神国論の中だけを見ても、アウグスティヌス自身が感ずることのなかった幾つかの矛盾が現れているようです。

A 人間観

その第一は、人間観です。アウグスティヌスによると、神は精神活動をする靈魂を先ず創造し、それを土に注入しました。理性と知性という精神活動をしない動物と比べ、人間はこの点でまさっているとアウグスティヌスは言います(12:24)。すなわち、靈魂の部分こそ神に似ていて尊いのです。ですから「魂はどんな身体よりも. . . すぐれた存在である(22:4)と語りました。霊と肉、精神活動と肉体活動をはっきりと分け、前者を後者より優れ勝っているとするのは、ギリシャ的人間観であって、聖書のものではありません。聖書によれば、人は最初から霊肉一体のものとして造られ、⁵霊と肉に上下の関係はありません。霊も肉も「非常によかった」のです(創世記 1:31)。

B 被造物観

第二は他の被造物に対する蔑視です。

神国論でアウグスティヌスは、多くの章を割いてプラトン主義、またプロティノスの新プラトン主義と対話し、多くの点でキリスト教信仰と(新)プラトン主義の類似点を見いだしています(8:5-11, 10:1以降)。アウグスティヌスが見いだす両者の類似点の一つは、唯一神への崇敬です。「イエスとプロティノスとの摂理観の類似」の中で、アウグスティヌスは、マタイ6章のイエスの

言葉、「空の鳥を見よ」を引用し、次のように書きました。

人間の魂はもろく、いぜんとしてこの世のものを願望している。したがって[人間の]こうした魂にとって最善であるのは、はかないこの世の生にとっては欠くべからざるものとはいへ、来世における永続的な賜物に比べれば蔑視すべき、地上の下のなもろもろの財物を時に願うような場合であってすら、それをただ一なる神からのみ期待するようになっていくことである。人間の魂は、そうなれば、たとえこうした財物を願う際であってさえ一なる神の崇敬から離反することはなく、ひいてはそうしたものを侮蔑し、背を向け、一なる神に至るようになるのである。

(10:14)

アウグスティヌスにとって、この世のもの、可視的なものは、生きていく以上必要だが、「来世における永続的な賜物に比べれば蔑視すべき」もの、「地上の下のなもろもろの財物」でしかありません。つまりアウグスティヌスの唯一神への崇敬は、靈魂の精神活動だけが神に似ていて尊いという前提のもとに、神が造り非常に良かったと言われた地上の被造世界を「下等」「侮蔑」視することによって成り立っているのです。

当時の考え方に「靈魂の犯した罪に対する刑罰として靈魂が身体の中に閉じこめられている」というものがありました。アウグスティヌスは、そのような主張に対し、創世記1章3節「はなはだ善かった」との句を引用し、肉体や物質自体が悪なのではない、と反駁しています。⁶またアウグスティヌスは、被造世界の中に創造者から来る正義と秩序、平和と愛を認めてもいます。

しかしながら「一なる神に至る」ことを追求するアウグスティヌスにとって、肉体や地上の被造世界は、悪ではないにしても、あくまでも下等であり、蔑視すべきものなのです。これは聖書の創造論から明らかに離れた考え方です。

⁴ 石原謙、454。

⁵ 創世記二章の「息」は、靈魂でなく、生命の現れです。最初から人として造られたアダムに命が注がれて、生きる者となったのです。

⁶ 第11巻23章「オリゲネスの誤れる教え」

IV 終末論

創造論における誤りは終末論に影響していきま
す。

A 聖書的理解

聖書と教会の基本信条⁷にも立とうとするアウグ
スティヌスは、肉体の復活を擁護し（例えば 2
2 : 1 2）、また、最後の審判の後の新天新地を
正しく描写しています。

そのときこの世界の姿は、大規模な火の燃焼
によって過ぎ去るであろう。ちょうどかつて、
大規模な水の氾濫によって大洪水が起こっ
たように。そしてわたしが今述べたこの大火
災によって、私達の朽ち果てる身体に見合っ
た朽ち果てやすい性質の要素は燃焼してす
っかり滅び、世界は驚くべき変化によって不
死となった身体に似合う性質をもつであろ
う。それはすなわち新たにされてより良くな
った世界が、身体的に新たにされてより良
くなった人間にうまく適合するためである。⁸
すなわち、アウグスティヌスは、旧新約聖書と古
代教会の理解に従って、救いの完成を靈魂が天に
行くこととは理解していないし、この地が消滅す
るとも語っていません。地上の朽ち果てるべき物
が「大火災」により燃焼するが、私達の身体はよ
みがえり、世界もまた朽ちない新たなものに変え
られるのだ、と理解しています。これはイレナイ
ウスの救済観・終末論を引き継いでいるように見
えます。

B 新プラトン主義的要請

しかし、本当にそうでしょうか。「下等」で「蔑
視すべき」地上の目に見える世界に「背を向け、
一なる神に至る」事を切に願う | するアウグスティ
ヌスのネオ・プラトニックな靈性は、「目に見え
る世界を伴った救いの完成」という聖書的思想と
は相容れません。彼にとって救いは神のおられる
天上で完成せざるを得ないのです。

C ジレンマの解決

1 肉体召天の教理

肉体の復活を否定できず、かといって地上の目
に見える世界に「背を向け、一なる神に至」らな
ければならないアウグスティヌスは、肉体召天の教
理を展開しています。

彼は肉体の復活を否定する者達に対し、人間は
身体をもって天に引き上げられると主張しまし
た。⁹また「魂が至福となるためには身体を逃れ
ねばならない」とのポルフェリオスの考えに対し、
「天的身体をまとっていると考えられた神々」の
不死性を語るプラトンの言葉を引用し、身体をも
ってしても至福となれると論じています。¹⁰肉体
の復活を否定できないキリスト教と、「救済は下
等な被造世界から離れた天上で完成されなけれ
ばならない」と言う新プラトン主義的要請の間
には大きな矛盾があります。ところがこのジレン
マが、ギリシャ神話の神々と同様な「肉体召天」と
いう教理によって解消するのです。

2 被造世界の神への吸収・内包化

もう一つの大きな課題は、被造世界に関する考
え方です。聖書は被造世界全体が贖われ完成され
ると語りますが、新プラトン主義は目に見える世
界を蔑視し天上を志向しています。そこには、大
きな葛藤があるのはずなのですが、アウグスティ
ヌスはこの葛藤を、被造世界の神への吸収・内包
化というプラトン主義的理解で乗り越えようと
しています。

「神国論」の最終章、第 2 2 卷 3 0 章「神の国
の永遠の至福と永遠の安息」で永遠の至福の状
態を説くのにあたり、アウグスティヌスは、「神が
すべてにあつてすべてとなる」との使徒の言葉、
また「わたしは、... 生命、健康、食物、富、...
となる」との預言者の言葉を引用し、「神は私
たちの願い求めるものの終わりである。この神は
終わることなく見られ、飽くことなく愛され、うむ

⁷ 例：古ローマ信条、ニケア信条。

⁸ 第 2 0 卷 1 6 章「新しい天と新しい地」

⁹ 第 2 2 卷 4 章「人間の身体は天の住居に昇りえない
との主張に対して」

¹⁰ 第 2 2 卷 2 6 章

ことなくたたえられる」と語っています。この神国論の最後の章では、人間以外の被造世界への言及は一切ありません。「神こそがすべてにあってすべてとなる」からです。ここで、目に見える世界は姿を消し、選ばれたものは天上で神のみに目を注ぎ、神を永遠に称えて過ごすのです。

確かにアウグスティヌスはこの章で、この永遠の状態においても人間が自由意志を持っている事を認め、愛を語っています。その意味で、意識がなくなり、神と神秘的に一体となるような神秘主義とはある程度の隔たりがあります。しかしながら、他の被造世界は神の内に吸収され、礼拝者の意識からは消滅しているのです。これは、正にプラトン主義的救済の完成状態といえるでしょう。これに比べ、聖書は、全被造世界が贖われて刷新され、そして贖われたものがその世界を神と共に永遠に治める（黙示録 22:5）と明言しています。アウグスティヌスの終末観は、聖書の終末観とは異質のものなのです。

D まとめ

肉体召天と被造世界の神への吸収・内包化というアウグスティヌスの終末観は、キリスト教と、新プラトニズムの混合妥協の産物というより、ギリシャ哲学の救済観により近いものと言えます。徹頭徹尾、全被造世界の統合と変貌を待ち望んだイレナイウス、そしてイレナイウスの伝統を受け継ぐ東方教会の神学との違いを際立たせています。

11

V 後代への影響

アウグスティヌスによるこれらの人間観、救済観、終末観が西方教会に与えた影響は計り知れません。

聖書では、新しい地上に降りてきた新しいエルサレムに現されているように、神は目に見える世界の中心におられます。ところが、アウグスティヌスによれば、神は、御自身の内に被造世界を吸収してしまっています。この相反する二つの思想

11 前掲、『終末の今を生きる』参照。

は、アウグスティヌスの内に矛盾として感じられることなく存在していたのかも知れません。しかし彼以降のカトリック神学は、アウグスティヌスの新プラトン主義的基調を忠実に踏襲した結果、前者（目に見える世界、新天新地）が後退・消滅し、後者（天上での神との合一）が強調されていきます。以降のカトリック神学における終末論の展開はこの小冊子の範囲を越えてしまっていますが、約千五百年にもわたって西方神学の新プラトン主義的傾向は続いてきたようです。例えば、現在のカトリック要理によれば、この時代の終わりに、先ず復活があり、次にキリストが再臨し、その時キリストは、公審判（最後の審判）において全ての人を裁く、とあります。その時「義人は、霊魂とからだをもって天国の永遠の幸福に入る」と語っています。¹²第二バチカン公会議は、要理の一部に解説を加えましたが、それによると、教会は「万物の更新」を目指していて、その「万物の更新」の日には「教会は、天上の永遠の栄光の中にその完成を見いだします」と言う。¹³すなわち、ローマ教会も、全被造物の更新を語りながら、その更新の日には全被造物が意識の中から消滅するのです。

この事は、アウグスティヌスに忠実だったカルバンとその後継者にも繰り返されているようです。カルバンは綱要の中で、贖いは全被造物を含み（3:25:2）、完成された状態は、肉体も物質も含むという聖書的理解を示しています。しかし、同時にそれは「天」において成就するというのです（3:25:10, 11）。

要するに、キリストは、[その民に豊かに注ぎたもう]多種多様の賜物によって、この世において御からだの栄光を開始し、一段一段とそれを増し加えたもうが、そのように、これを天において完成させたもうのである。（3:25:10）

被造世界の贖いを知的には認めつつ、最終的には

12 カトリック中央協議会編、『カトリック要理』（東京：中央出版社、1960）、第22課 151条。

13 『カトリック要理』、272。

天上での完成を志向するアウグスティヌスの矛盾が、初期カルビニズムにおいて再現しているように思えます。そして、ウエストミンスター大教理問答では、肉体の復活、最後の審判に続く問90の答えで次のように語っています。

審判の日に、義とされた者は、雲におおわれてキリストのもとに引き上げられ、．．．天に受け入れられ、その天で彼らはあらゆる罪と悲惨から完全にまた永遠に解放されます。そして彼らは想像も及ばない喜びに満たされ、．．．その体と魂の両面において永遠に完全に清く幸いな者とされます。

ウエストミンスター大教理問答の最終的永遠的状态を語るこの答えには、他の被造世界への言はありません。被造世界は意識から消え、救いはあくまでも天上で完成するのです。カルバンにおいて一旦聖書的終末論が回復されたように見えました。結局新プラトニズムの影響を克服することは出来なかったようです。ここにおいてプロテスタントも「死んだら永遠に天国」と告白しているのです。

この長い西洋の伝統に疑問を投げかけ、全被造世界の回復と完成を語り始めるのは、19世紀末のアブラハム・カイパー以降のオランダ改革派の一部の出現まで待たなければなりません。そして20世紀の後半に入ると、オランダ改革派の枠を越えた他の組織神学者、また聖書神学者達が、全被造世界を対象として救済論・終末論を展開し始めています。このこと注目に値します。¹⁴なぜなら、全被造世界を贖いの対象とし続けてきた東方教会に比較し、西方教会のこの動きは1500年の沈黙を破っているものだからです。

VI 現在の生き方、靈性への影響

人間観、救済観、終末観は、キリスト者の日々の靈性と生き方に影響を与えます。

「下等」で「蔑視」すべき地上の可視的被造世界に「背を向け、一なる神に至」ることを最終最

高目的とする靈性は、社会・文化への無関心に行き着きます。あるいは、社会からの分離、過度の苦行や、修道院的敬虔とも結びついていきます。修道院的敬虔は、東方帝国教会の世俗化に対する反動だけでは説明できません。その思想的な前提として上記のような新プラトン主義的な考え方があるのです。

神との親しい交わりと国家への責任という両者は、アウグスティヌスの神国論の中で統一されていたようです。しかしながら、新プラトニズムの *ecstasis* に代わるものとしてアウグスティヌスが提唱した *contemplatio* の追求は、社会や被造世界に対する責任感の低下を結果的に招いたと言えると思います。たとえ、後代の西方教会が公には被造世界を蔑視していなくても、西方教会の教理の最終段階において被造世界が意識の中から消滅している事実は無視できません。その場合、人間にとって他の被造世界は究極的な意味はなく、その被造世界にどの様に関わるかという問いも重要ではなくなってしまうからです。するとやはり地に足を付けた歩みからは、関心が薄れて行かざるを得ないでしょう。別の言い方をすれば、新プラトニズム的思想が生み出すものは、現実から遊離しがちな靈性の追求、そして実生活の世俗化、という二極化なのです。

この二極化は、西方、東方を問わず、修道院的敬虔とキリスト教社会の世俗化に現れてきたと思われます。そしてプロテスタントの内にも形を変えて受け継がれているようです。例えばインドへの宣教師でありまた宣教学者であったレスリー・ニュービギンは現代のプロテスタントリズムを次のように表現しています。

我々の信じている神は宗教的な問題にしか興味がないかのように我々は度々提示してきた。そのため、芸術家や科学者また人道主義者を福音から遠ざけてきてしまった。彼らが周囲に見いだす真善美に我々が無頓着に見えるからだ。我々はキリストの独自性を主張するため、創造と人間性における神の偉大

¹⁴ 前掲、『終末の今を生きる』参照。

なみ業を否定してきたように思われる。¹⁵ プロテスタントイズムもまた、神の創造のみ業を軽視することによって、私たちの魂を神に近づけようとしてきたと言えるでしょう。

VII 最後に

A まとめ

上記をまとめてみましょう。アウグスティヌスは、聖書と信条に忠実であろうとしました。しかし、新プラトン主義の影響を深く受けていたために、「下等」で「蔑視」すべき地上の可視的被造世界に「背を向け、一なる神に至」ることを最終最高目的とする思想から逃れることが出来ませんでした。そのため、アウグスティヌスは「肉体召天」と「被造世界の神への吸収・内包」という二つのギリシャ的思想を用いることによって、復活と新天新地を形式上は否定することなく、終末を語ることになりました。アウグスティヌス以降のローマ教会とプロテスタントは、アウグスティヌスを踏襲し、形式上は復活と新天新地を告白しますが、実質的には、被造世界は消滅し、天上で神と合一することを最終状態としています。すなわち、「死んだら永遠に天国」となるのです。そしてこの霊性が生み出すものは、被造世界から遊離した霊性の追求と、実生活の世俗化という二極化でした。

B 聖書的キリスト教に基づく霊性を

新プラトン主義的な思想の枠内にいる限り、この二極間の振り子から抜け出すことは困難です。千五百年にもわたる西方教会の伝統を乗り越えて、聖書的霊性を求めるためには、創造目的の回復・完成という神のご計画に眼を留める必要があるでしょう。

神は愛情深く世界を造り、非常に良いと言われました。私たち人間を神の像に、また霊肉一体の存在としてはじめから造られ、その被造世界を委

ねられたのです。私たちが、創造者との愛の交わりの内に被造世界を愛と正義によって治めることが神の創造目的です。そして、墮落によって損なわれたこの目的を回復するのがキリスト教救済論の中心であり、そしてその目的の完成を語るのが終末論なのです。

ですからこの「創造秩序の回復」というキリスト教理解によれば、創造者との親しい交わりと被造世界は矛盾しません。私たちは神との親密な愛の交わりも希求していますが、同時に、いや、それが故に、私たちは常に被造世界に対する愛の関わりの中で生き、自らの心・実生活また社会を変革していくのです。聖書的なキリスト教観は、このような霊性の基盤また出発点と言えるでしょう。

神よ、あなたが天であがめられ、
あなたの栄光が全地で

あがめられますように。

詩篇 108:5 (6)

¹⁵ Lesslie Newbigin, *Trinitarian Doctrine for Today's Mission*, Biblical Classics Library (Carlisle, UK: Paternoster Press, 1998), 27.

創造の回復シリーズ

神の造られた世界は秩序あるよいものでしたが、墮落の故に歪んでしまいました。しかし、神はキリストによって全被造世界を創造本来のあり方に回復し、また完成させようとしています。この小冊子シリーズは、創造秩序の回復と完成というキリスト教独自の視点で書かれています。

No.1 終末の今を生きる：千年王国説の違いを超えて

私達の救いは、仏教やギリシャ思想のように魂が天に行くことで終わるものではありません。実は、キリストがもう一度地上に来て、私達を新しい地上によみがえらせ、全世界を変えて永遠に治めて下さることこそが救いの完成なのです。このキリスト教終末論は、聖書、古代教会の理解、また福音派の学者によって支持されているだけでなく、生活の現場での私達の日々の労苦が無駄でない、と語ります。(B5版、15ページ)

No.2 神国論に見る新プラトン主義的靈性

救いが天上で完成するというのは、二元論的なギリシャの異教思想です。この異教思想は5世紀前後に西方教会(ローマ教会)に入って来たようで、アウグスティヌスの神国論にもその軌跡が見いだされ、それは、宗教改革者にも影響を与えています。(B5版、6ページ)

No.3 内村鑑三の終末観：世界観的回心の体験

西方教会に入って行ったギリシャの異教思想は、プロテスタントに引き継がれ、内村鑑三も二元論的な救済観を持っていました。しかし、内村は、1918年にそれまでの救済観から脱却し、古代教会が持っていたような聖書的な救済観・終末観に開眼し、生き方が変化して行きます。(B5版、3ページ)

No.4 デートの原則、結婚、性

婚前交渉と墮胎をする若者の年齢は益々低年齢化しています。その背後には、自分と異性また、性と結婚に対する間違った考え方があります。この小冊子は聖書が語る人間観、性、結婚観を出発点として、デートの原則を探ります。高校生以上の方々、中高生科のスタッフ、またご両親方にお勧めします。(B5版、13ページ)

著者紹介

島先克臣(しまさき かつおみ) 1954年埼玉県久喜市生まれ。二十歳の時入信。立教大学英米文学科、聖書宣教会、米国ゴードン・コンウェル神学校旧約修士、英国チェルトナム・グロスター大学旧約博士過程(ヘブル言語語学)終了。牧師(日本1981-87)、宣教師(フィリピン1988-93, 2000-04)。3児の父。

神国論に見る新プラトン主義的靈性

2000年4月30日 発行

著者 島先克臣

発行者 島先克臣

〒346-0002 埼玉県久喜市野久喜 835-6